

原 著

旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の地域への愛着を測定する尺度の開発 Development of Scale of Community Attachment among Late Middle-Aged and Elderly Residents in Japanese Rural Communities

滝澤寛子¹⁾、櫻井尚子²⁾

Hiroko Takizawa¹⁾, Naoko Sakurai²⁾

1) 京都学園大学健康医療学部

2) 東京慈恵会医科大学大学院医学研究科

1) Faculty of Health and Medical Sciences, Kyoto Gakuen University

2) Graduate School of Medicine, The Jikei University

要旨

目的：旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の健康づくり活動を促す「地域への愛着」を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。

方法：先行研究の結果に基づき地域への愛着尺度原案を作成した。先行研究を参考に旧農村地域を設定し、A市の当該地域在住の55歳～74歳のうち、住民基本台帳より年齢と性別を層化無作為抽出した2,054人を対象に無記名自記式質問紙の郵送調査を行った。項目分析、因子分析を経て確定版を作成し、信頼性と妥当性を検証した。

結果：有効回答数は1,033人（有効回答率92.9%）であり、男性512人（49.6%）、女性520人（50.3%）、平均年齢64.5歳（SD ± 5.5）であった。分析の結果、地域への愛着尺度は、【わきおこる地域・人への思い】【かけがえのない地域】【つながる安心】の3因子15項目で構成され、尺度全体のクロンバック α 係数は0.93、地域の健康づくりや福祉活動への参加頻度、健康関連QOL尺度の精神的健康度、近隣づきあい尺度、ソーシャル・キャピタル測定尺度等との間に正の相関が認められた（ $p < 0.01$ ）。

考察：開発した尺度は、旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の健康づくり活動を促す「地域への愛着」を測定する尺度として信頼性と妥当性を有すると考えられた。

Abstract

Objective: This study develops a scale to measure “community attachment” that stimulates the health promotion activities. We focused on late middle-aged and elderly residents in Japanese rural communities.

Method: A pool of items was developed through a review of our previous qualitative studies. The subjects were 2,054 residents aged 55-74 years, randomly selected from City A in Japan. A self-administered questionnaire was distributed to the subjects, and the responses were anonymously collected by mail. The collected data were analyzed.

Results: The number of valid respondents was 1,033 (valid response rate: 92.9%) , of whom 49.6% were men and 50.3% were women. The mean age \pm SD was 64.5 \pm 5.5 years. Using item analysis and factor analysis, we developed a scale to measure community attachment. The scale included three subscales— “bonds of safety,” “swelling feelings towards the community and its people,” and “a beloved community like no other” —comprising 15 items in total. The Cronbach's alpha coefficient of the total items of this scale was 0.93. The scores on this scale had a significant correlation with frequency of participation in health promotion and welfare activities, scores on the mental component summary in the 12-Item Short Form Health Survey, scores on Activities with Neighbors, and scores of Integrated Social Capital Index ($p < 0.01$) .

Conclusions: The developed scale was considered reliable and appropriate for measuring “community attachment”. These results suggest that work motivation plays a large role in the formation of professional behavior in nurses.

キーワード：地域への愛着、向老期、健康づくり、尺度開発

Keyword : community attachment, late middle-aged, health promotion activities, scale development

I. 緒言

地域への愛着に関する研究は、哲学、地理学、社会学、建築学、文化人類学、心理学など多様な分野で行われてきた。近年になって、地域への愛着感が後期高齢女性の5年生存率を高めること¹⁾や高齢者の自殺率を下げること²⁾、主体的な健康づくり活動やまちづくり活動の推進要因となること³⁻⁵⁾が示唆され、地域への愛着は、まちづくりや健康づくりにおいて重要な要因となりうることが示された。

一方で、地域への愛着という概念は、アメリカ社会の高い流動性と深く関わる問題意識を含んで発展した経緯をもち、日本ではあまり行われてこなかったこと、さらに、この概念には文化的な側面が含まれ文化的背景を鑑みた検討が必要であることが指摘されている⁶⁾。欧米諸国では、質的記述的研究による地域への愛着の概念分析⁷⁻¹⁰⁾をはじめ、信頼性・妥当性を有する地域への愛着を測定する尺度の開発¹¹⁻¹²⁾が報告されている。日本においては、比較文化学¹³⁾、社会学¹⁴⁾、心理学¹⁵⁾、教育学¹⁶⁾、土木工学や建築学¹⁷⁻²¹⁾の分野で、地域への愛着心を規定する要因や、愛着の形成過程、交通行動や消費行動による風土との関わり、協力行動や向社会的行動との関係などを検証する実証研究が行われてきた。これらの研究では、地域への愛着を、愛着を感じる程度¹³⁾や、先行研究を参考にした独自の項目による尺度¹⁴⁻²¹⁾で測定しているが、質問項目が日本社会における「地域への愛着」をどの程度正確に測定できているかの検証はされていないのが現状である。そのような中、公衆衛生看護の分野で、向老期世代における地域への愛着を測定する尺度の開発が報告された²²⁾。都市部の向老期世代における地域への愛着を測定する尺度としての信頼性、妥当性が確認されたが、都市部以外の居住地においては今後の課題となっている。

筆者らは、先行研究²³⁾として、地域への愛着が主体的な健康づくり活動の推進要因であることに着目し、旧農村地域の55歳～70歳を対象にインタビュー調査を行い、健康づくり参加者が「地域への愛着」を形成するプロセスを検討した。その結果、地域への愛着は、その地域で暮らす生活と、人とのつながりとの相互作用によって生まれ、健康づくり活動を含めた地域

の人々をつなげる活動を通じて高められていく構造を見出した。本研究では、この知見に基づき、日本の旧農村地域における「健康づくり活動に結びつく地域への愛着」を測定する尺度を開発し、その信頼性、妥当性を検討することを目的とする。

旧農村地域における「地域への愛着」に着眼したのは、高齢者の地域見守りネットワーク活動に必要なソーシャル・キャピタルを検討した研究²⁴⁾において、都市部と農村部では違いがみられ、農村部では地域への愛着による相互依存関係が見守り活動に役立てられていたことが確認されていた一方で、農村コミュニティの特徴が都市化の進展や人口流出、少子高齢化による影響で今後も変化していくことが予測されている²⁵⁾からである。

なお、本研究では、地域への愛着を「自分が住んでいる地域で暮らす生活と、人とのつながりとの相互作用によって育まれていく、自分にとってその地域やそこに住む人々が大切で特別だと思ふ感情や思考」と定義した。また、農林水産省食料・農業・農村基本問題調査会農村部門²⁶⁾や農村におけるソーシャル・キャピタル研究会の定義²⁵⁾を参考に、旧農村地域を「農林業的な土地利用が大きな割合を占め、豊かな二次的自然環境及び土地、水といった公共財の資源を有する地域であり、従来の農作業や農業用水の利用を中心に家と家とが地縁的に結びついた関係性という農村コミュニティの特徴を残しながら、新たに農作業に従事しない人々が定着して生活している地域」と定義した。具体的には、①農業地域類型の「都市的地域」または「平地農業地域」であり、農業振興地域の整備に関する法律における「農業振興地域」であり、②中枢・中核都市から1時間圏外の地方圏に相当し、③過去10年間の人口推移で人口が増加していることを選定基準とした。さらに、本研究では、ライフステージにおいて、自分の身体能力や社会での役割の変化に適応しながら自ら積極的に健康づくり活動に取り組むことが、その後の豊かな人生を送るために重要な時期である、向老期から老年期前期を研究対象にした。具体的には、55歳～64歳を向老期、65歳～74歳を老年期前期とした。

II. 研究方法

1. 地域への愛着を測定する尺度原案の作成

地域への愛着を形成するプロセスの検討結果²³⁾より、健康づくり活動を通じて地域への愛着を形成するプロセスで中核となる《愛着の芽生え》《かけがえのない地域》《わきおこる「地域」「人」への思い》《つながる安心》の4つのカテゴリーを取り出し、尺度化した。地域への愛着を形成するプロセスの検討におけるインタビューデータに基づきアイテムプールを作成し、共同研究者と内容のおよび表面的妥当性の検討を重ねた24項目を用いた。回答は「とてもそう思う」から「まったく思わない」の5段階評定とし、得点が高いほど、地域への愛着が高くなるように配点した。

2. 調査対象と方法

調査対象地域として旧農村地域の選定条件を満たすA市を選定し、本研究協力に関する協定を締結した。調査対象者は、選定条件を満たす地域に在住の55歳～74歳である。住民基本台帳より年齢と性別を層化して無作為抽出した2,054人を対象に無記名自記式質問紙による郵送調査を行った。調査期間は2014年11月3日～30日である。

調査内容は、地域への愛着尺度原案と、基本属性ならびに尺度の妥当性検証のための特性とした。基本属性については、性別、年齢、居住地区、居住期間、家族構成、職業、農業との関わりについて尋ねた。尺度の妥当性検証のための特性については、健康関連QOL尺度のSF-12日本語版²⁷⁾による健康度、健康づくり活動を含めた地域活動への参加状況、自然の中で過ごす時間、近隣効果尺度日本語版の「近隣づきあい」尺度²⁸⁾、および市田らのソーシャル・キャピタル測定尺度²⁹⁾（以下、ISCIとする）による、地域の人々とのつながりや安心・信頼感とした。地域活動への参加状況は、農村におけるソーシャル・キャピタル研究会の調査²⁵⁾を参考に、環境、健康づくりや福祉、安全、地域活性化、自治会、スポーツ、趣味、歴史・文化、宮寺の管理・伝統行事、葬儀の手伝い、10項目の活動について「よくする」から「まったくしない」の4段階で尋ねた。自然の中で過ごす時間は、「とても多い」から「全くない」の5段階で尋ねた。「近隣づきあい」尺度は、Mujahidらが開発した近隣効果尺度を大賀らが日本語版に開発した下位尺度の1つで、下位尺度の単純加算得点を用いて個人レベル³⁰⁾および、地区単位レベル²⁸⁾での分析で用いられ、有用性が確認されている。ISCIは、市田らによって開発され信頼性、妥当性が確認されたもので、尺度中の項目を用いて個人レベ

ルおよび、地域レベルでの分析に用いられている³¹⁾。

本研究では、健康づくり活動を促す「地域への愛着」を測定する尺度を開発する。よって、本尺度の得点が高いほど、健康づくりや福祉活動への参加頻度が高く、健康度も高くなると考えられる。また、本尺度は、人々とのつながりや安心感を内包することが先行研究²²⁾からも推測されることから、近隣づきあい尺度および、ソーシャル・キャピタル測定尺度との関連が認められると考える。さらに、先行研究より、地域への愛着は居住期間^{3,13,14,17)}、自然の中で過ごす時間¹²⁾との相関が確認されている。よってこれらの指標を外的基準とした。

3. 分析方法

各項目について、項目困難度、選択肢の回答割合と分布、平均値、標準偏差、項目間相関、Good-Poor Analysis (G-P分析)、Item-Total Correlation Analysis (I-T相関)を用いて項目分析を行った。G-P分析では、尺度原案の合計得点の上位群25%と下位群25%の平均点の差を算出した。I-T相関は、尺度原案の各項目得点と当該項目を除く合計得点におけるPearsonの相関係数を算出した。

因子分析を用いて、尺度の洗練と構成概念妥当性を検討した。項目分析の結果、不適当と判断した項目を除いた全項目を用いて探索的因子分析（一般化された最小二乗法、プロマックス回転）を行った。因子数は初期解におけるスクリープロットと固有値を基準に推定し、各因子に含まれる項目の意味内容を解釈のうえ因子の命名を行った。次いで、探索的因子分析によって得られたモデルを用いて確認的因子分析を行い、適合度指標を検討した。

信頼性の検討には、クロンバック α 係数を算出し内的整合性を確認した。

基準関連妥当性の検討には、先行研究より理論的に関連があると考えられる外的基準と尺度得点のPearsonの相関係数を算出した。

統計学的分析にはWindows版SPSS ver.23を用い、有意水準5%未満とした。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、調査への協力依頼時に、調査の目的と方法、協力の任意性、匿名性の保持等について書面にて説明した。内容を理解したうえで研究に参加することに同意する場合は、自らの自由意思に基づき、質問紙に回答してもらうものとし、質問紙の返答をもって同意を得たものとした。なお、本研究は、事前に京都大学医の倫理委員会（承認番号：E2339）およ

び東京慈恵会医科大学倫理委員会（承認番号：7006）の承認を得て行った。

Ⅲ. 研究結果

1. 質問紙の回収結果

2,054 人に質問紙を郵送したうち、転居先不明等で現住所に居住していない人 11 名分が含まれ、回答者数は 1,112 人（回答率 54.4%）となった。回答者のうち、年齢および居住地区が不明または調査対象外の者 25 名と、尺度原案への未回答のあるものを除いた 1,033 人（有効回答率 92.9%）を分析対象とした。

2. 対象者の背景

男性 512 人（49.6%）、女性 520 人（50.3%）、55～64 歳が 534 人（51.7%）、65～74 歳が 499 人（48.3%）で、平均年齢 64.5 歳（SD ± 5.5）だった。現在の住まいの居住期間は平均 45.9 年（SD ± 16.6）で、市内の居住期間は平均 55.8 年（SD ± 14.1）だった。家族構成は、ひとり暮らしが 46 人（4.5%）、夫婦のみ世帯が 311 人（30.1%）、2 世帯同居が 430 人（41.6%）、その他が 240 人（23.2%）で、地域内に親戚・親類が住んでいる人は 954 人（92.4%）だった。現在の職業は、農林漁業が 86 人（8.3%）、自営業 95 人（9.2%）、被雇用者 353 人（34.2%）、無職 442 人（42.8%）、その他 44 人（4.3%）

で、定年等で退職をしている人が 562 人（54.4%）だった。農地を所有している人は 750 人（72.6%）で、耕作を行っている人は 419 人（40.6%）だった。

あなたの住む地域と言われた時に、どこのことだと思いかを尋ねた結果、市が 209 人（20.2%）、旧町が 236 人（22.8%）、学区が 313 人（30.3%）、自治会が 262 人（25.4%）だった。

3. 項目分析

尺度原案 24 項目の項目分析の結果は表 1 の通りである。各項目の項目困難度は 0.2～1.2% で欠損値の割合は低く、平均値は 3.3～4.2 点で天井効果と床効果がみられる項目もなく、各選択肢への回答割合も 60% を超えるものはなく回答の偏りがみられる項目はなかった。

項目間相関を算出した結果、13 組（項目 7 と 10、8 と 9,10,11、9 と 10,11、10 と 11,13、13 と 15、17 と 18,19、19 と 20,22 と 23）で相関係数が 0.7 以上であった。これらの項目の意味内容を吟味し、他の項目に同様の意味内容が含まれていると判断した 5 項目（項目 9,10,17,19,22）を除外した。また I-T 相関を算出し、相関係数が 0.4 未満であった 1 項目（項目 16）を削除した。G-P 分析を行った結果、すべての項目において上位群の平均値が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。

表 1 地域への愛着尺度原案の項目分析の結果

項目番号と項目	各項目の分布：人数(%)					平均値±標準偏差	項目困難度(%)	I-T 相関	GP 分析平均値の差
	全く思わない	あまり思わない	どちらでもない	まあそう思う	とてもそう思う				
1 地域の人との出会いには昔に戻れる楽しみがある	29 (2.8)	123 (11.9)	193 (18.7)	477 (46.2)	211 (20.4)	3.7±1.0	0.7	0.64 **	1.7 ***
2 初めて出会った人でも地元の話でつながる楽しさがある	22 (2.1)	141 (13.6)	231 (22.4)	500 (48.4)	139 (13.5)	3.6±1.0	1.0	0.61 **	1.5 ***
3 この地域は慣れたところで住みやすい	17 (1.6)	80 (7.7)	112 (10.8)	488 (47.2)	336 (32.5)	4.0±0.9	0.5	0.71 **	1.8 ***
4 車で15分程度の範囲で生活が完結できて住みやすい	26 (2.5)	94 (9.1)	94 (9.1)	512 (49.6)	307 (29.7)	3.9±1.0	0.9	0.56 **	1.5 ***
5 この地域の歴史や文化を誇りに思う	14 (1.4)	78 (7.6)	215 (20.8)	469 (45.4)	257 (24.9)	3.8±0.9	0.6	0.65 **	1.5 ***
6 この地域での生活は自然の豊かさを感じる	4 (0.4)	32 (3.1)	82 (7.9)	547 (53.0)	368 (35.6)	4.2±0.7	0.4	0.57 **	1.1 ***
7 地域の人とは心が通じあう安堵感がある	11 (1.1)	96 (9.3)	220 (21.3)	540 (52.3)	166 (16.1)	3.7±0.9	0.8	0.77 **	1.7 ***
8 近隣の人とはいい意味で気にかける関係だ	16 (1.5)	60 (5.8)	150 (14.5)	583 (56.4)	224 (21.7)	3.9±0.9	0.2	0.73 **	1.6 ***
9 近隣の人とはお互いに遠慮なく声をかけあえると思う	19 (1.8)	86 (8.3)	194 (18.8)	534 (51.7)	200 (19.4)	3.8±0.9	0.2	0.71 **	1.6 ***
10 地域の人とのやりとりには温かさを感じる	13 (1.3)	73 (7.1)	232 (22.5)	539 (52.2)	176 (17.0)	3.8±0.9	0.4	0.77 **	1.7 ***
11 近隣の人とは助け合えるという感じをもっている	12 (1.2)	74 (7.2)	179 (17.3)	555 (53.7)	213 (20.6)	3.9±0.9	0.5	0.72 **	1.6 ***
12 顔をみたらどこの誰か おおかたわかる安心感がある	18 (1.7)	61 (5.9)	182 (17.6)	517 (50.0)	255 (24.7)	3.9±0.9	0.3	0.64 **	1.5 ***
13 この地域の中にいると落ち着く	16 (1.5)	69 (6.7)	229 (22.2)	521 (50.4)	198 (19.2)	3.8±0.9	0.3	0.78 **	1.7 ***
14 この地域以外のところに住もうと思わない	98 (9.5)	135 (13.1)	284 (27.5)	316 (30.6)	200 (19.4)	3.4±1.2	0.5	0.41 **	1.5 ***
15 自分にとって「かけがえのない地域」だ	29 (2.8)	97 (9.4)	290 (28.1)	417 (40.4)	200 (19.4)	3.6±1.0	1.2	0.75 **	1.9 ***
16 昔からこの地域にあったものが変わっていつている	17 (1.6)	114 (11.0)	158 (15.3)	573 (55.5)	171 (16.6)	3.7±0.9	0.4	0.26 **	0.6 ***
17 昔からある地域独自の生活文化を後世に伝えていきたい	40 (3.9)	151 (14.6)	363 (35.1)	376 (36.4)	103 (10.0)	3.3±1.0	0.9	0.69 **	1.8 ***
18 地域のことを色んな人知ってほしい	35 (3.4)	149 (14.4)	444 (43.0)	316 (30.6)	89 (8.6)	3.3±0.9	0.5	0.67 **	1.6 ***
19 昔からある「この地域らしさ」がなくなってしまうのは寂しい	41 (4.0)	138 (13.4)	347 (33.6)	388 (37.6)	119 (11.5)	3.4±1.0	0.6	0.66 **	1.7 ***
20 心の中に浮かぶ「この地域の良いところ」を残していきたい	21 (2.0)	93 (9.0)	236 (22.8)	508 (49.2)	175 (16.9)	3.7±0.9	0.6	0.70 **	1.7 ***
21 これからも住み続けることを考えて必要なことを準備する	26 (2.5)	89 (8.6)	246 (23.8)	527 (51.0)	145 (14.0)	3.7±0.9	0.7	0.64 **	1.5 ***
22 地域の人にお世話になったので恩返しをしたい	20 (1.9)	95 (9.2)	336 (32.5)	465 (45.0)	117 (11.3)	3.5±0.9	0.5	0.73 **	1.6 ***
23 地域や地域の人々に役立つことをしたい	16 (1.5)	79 (7.6)	295 (28.6)	512 (49.6)	131 (12.7)	3.6±0.9	0.6	0.69 **	1.5 ***
24 地域の人との交流が元気のもとだ	35 (3.4)	127 (12.3)	359 (34.8)	383 (37.1)	129 (12.5)	3.4±1.0	0.4	0.76 **	1.9 ***

: $p < 0.01$, *: $p < 0.001$

4. 因子分析

項目分析の結果、不適当と判断した6項目を除いた18項目について、探索的因子分析を行った。初期解におけるスクリープロットと固有値を基準に因子数を3と判断し、因子負荷量0.35未満の項目を除いて段階的に因子分析を行った結果、3因子15項目の、それぞれの項目の所属も明確で解釈も可能な解を得た(表2)。

第1因子は「この地域の良いところを残していきたい」「地域や地域の人々に役立つことをしたい」など6項目で構成され、地域の歴史や文化を誇りに思い良いところを残したい思いや地域の人々に役立つことをしたい思いを包含する【わきおこる地域・人への思い】とした。第2因子は「自分にとってかけがえのない地域だ」「この地域以外のところに住もうと思わない」など5項目で構成され、住みやすくて気持ちが落ち着く自分にとって【かけがえのない地域】とした。第3因子は「心が通じあう安堵感がある」「助け合えるという感じをもっている」など4項目で構成され、地域の人とは心が通じ合い助け合えると感じる【つながる安心】とした。

確認的因子分析の結果は図1の通りである。適合度指標は、GFI=0.91、AGFI = 0.88、CFI=0.93、RMSEA = 0.07であり、統計学的な許容水準が確認された。

5. 尺度の内的整合性

尺度全体のクロンバック α 係数は0.93、第1因子は0.88、第2因子は0.83、第3因子は0.86であり、内的整合性は保たれていた。

6. 外的基準との相関

尺度15項目の合計得点と理論的に関連があると考えられる変数との相関を調べた結果、地域の健康づくりや福祉活動への参加頻度 ($r=0.32$)、健康関連 QOL 尺度の精神的健康度 ($r=0.31$)、近隣づきあいの各項目 ($r=0.37 \sim 0.44$)、ISCI の財布が返る確率以外の各項目 ($r=0.31 \sim 0.45$)、自然の中で過ごす時間 ($r=0.31$) との間で比較的強い相関に近い相関を認めた (いずれも $p<0.01$)。ISCI の財布が返る確率 ($r=0.27$)、現在の住まいの居住期間 ($r=0.27$) とは正の弱い相関を認めた (いずれも $p<0.01$)。その他、健康づくりや福祉活動以外の地域活動への参加頻度との間にも正の相関が認められた ($r=0.25 \sim 0.38$, $p<0.01$)。

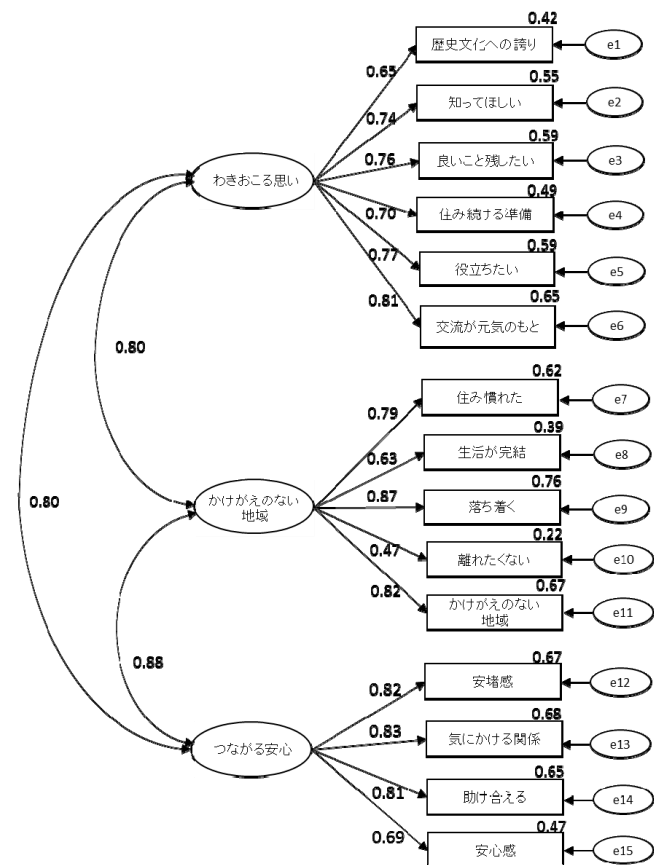
居住地区(小学校区)を単位として、地域愛着尺度得点の平均、近隣づきあい尺度得点、ISCI 得点を算出し相関を調べた結果、地域愛着尺度得点と近隣づきあい尺度得点 ($r=0.74$)、ISCI 得点 ($r=0.31$) との間に正の相関を認めた (いずれも $p<0.01$)。

表2 地域への愛着尺度の探索的因子分析の結果

因子【因子名】Cronbach's α 係数	項目番号と項目			
	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子【わきおこる地域・人への思い】 $\alpha=0.88$				
18 地域のことを色んな人に知ってほしい	0.84	-0.02	-0.08	0.63
20 心の中に浮かぶ「この地域の良いところ」を残していきたい	0.79	0.00	-0.01	0.67
23 地域や地域の人々に役立つことをしたい	0.78	-0.10	0.11	0.67
21 これからも住み続けることを考えて必要なことを準備する	0.63	0.21	-0.10	0.54
24 地域の人との交流が元気のもとだ	0.59	0.01	0.26	0.72
5 この地域の歴史や文化を誇りに思う	0.42	0.18	0.12	0.50
第2因子【かけがえのない地域】 $\alpha=0.83$				
3 この地域は慣れたところで住みやすい	0.00	0.88	-0.06	0.72
4 車で15分程度の範囲で生活が完結できて住みやすい	-0.06	0.75	-0.04	0.53
13 この地域の中に入ると落ち着く	-0.01	0.64	0.28	0.77
15 自分にとって「かけがえのない地域」だ	0.18	0.62	0.07	0.69
14 この地域以外のところに住もうと思わない	0.10	0.44	-0.06	0.27
第3因子【つながる安心】 $\alpha=0.86$				
8 近隣の人とはいい意味で気にかけてあう関係だ	-0.05	-0.07	0.96	0.78
11 近隣の人とは助け合えるという感じをもっている	0.03	-0.08	0.88	0.73
7 地域の人とは心が通じあう安堵感がある	0.05	0.35	0.48	0.69
12 顔をみたら この誰か おおかたわかる安心感がある	0.02	0.29	0.42	0.52
因子間相関	(第1因子)	1.00		
	(第2因子)	0.71	1.00	
	(第3因子)	0.71	0.76	1.00

全体 Cronbach's α 係数=0.93

因子分析:一般化された最小2乗、プロマックス回転



$\chi^2=724.3$ $p<0.01$, GFI=0.91, AGFI=0.88, CFI=0.93, RMSEA=0.07

図1 地域への愛着尺度の確認的因子分析の結果

IV. 考察

本研究は、旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の健康づくり活動を促す「地域への愛着」を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。尺度は【わきおこる地域・人への思い】【かけがえのない地域】【つながる安心】の3因子15項目で構成された。尺度の信頼性については、尺度全体および下位尺度ともにクロンバック α 係数が0.8以上あり、内的整合性が保たれていた。尺度の妥当性については、尺度項目ごとの項目困難度はいずれの項目も2%以下であり、回答困難な項目はなく表面妥当性があったと考える。また、因子分析の結果は適切に解釈できるものであり、当初想定していた4つのカテゴリーのうち《愛着の芽生え》《かけがえのない地域》が【かけがえのない地域】に集約された3因子構造で、構成概念妥当性が確認された。尺度と外的基準との間に正の相関が認められたことから基準関連妥当性も認められた。調査対象者は、農村コミュニティの特徴である定住性の高さや、農地の所有・耕作割合、近所づきあいの程度など、先行研究²⁵⁾と同様の傾向を示し、農村コミュニティの特性を有しながら新たに農作業に従事しない人々も生活している旧農村地域を反映できていると考える。以上より、本尺度は、旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の健康づくり活動を促す「地域への愛着」を測定する一定の信頼性と妥当性を有する尺度であると判断できる。

大森ら³²⁾は、地域への愛着の概念に関するコンセンサスが得られていない状況を鑑み、公衆衛生看護における地域への愛着の概念分析を行っている。住民自身が地元の視点で捉える地域における「地域への愛着」の特性として5つのカテゴリーを見出している。その中の、個人にとって、気持ちが落ち着く心地よさや安らかさといった『自分の存在基盤となる安堵感』は、本尺度の第2因子である、住みやすく気持ちが落ち着く自分にとって【かけがえのない地域】に相当するものであると考える。また、身近な人々との相互作用から得られる、自分がその地域の生活に溶け込んでいる感覚や周囲を把握できている感覚である『周囲との一体感』は、本尺度の第3因子である、地域の人とは心が通じ合い助け合えると感じる【つながる安心】に相当すると考える。最後に、住民の一員として周囲の人たちを大切に思いながらこの土地で生きる誇りである『周囲を大切に思う気持ち』や、自分の地域を何と

かしたい、もっと良くしたいという飽くなき探究心も包含する『終わりのない周囲への愛情』は、本尺度の第1因子である、地域の歴史や文化を誇りに思い良いところを残したい思いや地域の人々に役立つことをしたい思いを包含する【わきおこる地域・人への思い】に相当すると考えられる。地域の活動に自ずと楽しく専念できている『生きるための活力源』についても、この第1因子の中に包含されていると考える。このことから、本尺度の内容妥当性も確認できる。

都市部の住民を対象に開発された地域への愛着尺度²²⁾の質問項目と比較すると、「慣れたところで住みやすい」「生活が完結できて住みやすい」という質問項目があるのが本尺度の特徴となっている。大谷³³⁾は、地域愛着の認知的成分、情動的成分、行動的成分の構造を研究し、地域愛着に関する認知の構造は、交通や買い物と行った利便性と、住みやすい、居心地といった快適性の2軸からなることを報告している。利便性や快適性を含む住みやすさの項目が、旧農村地域特有であるのか、今後検討していく必要がある。

本尺度の合計得点は、地域の健康づくりや福祉活動以外の地域活動への参加頻度との間にも正の相関が認められた。これは、地域への愛着が、健康づくり活動やまちづくり活動の推進要因となるという先行研究³⁵⁾の結果と一致する。健康度との関連では、健康関連 QOL 尺度の精神的健康度と正の相関が認められた。この結果は、地域への愛着と自殺率²⁾や、主観的幸福感³⁴⁾との関連を示す先行研究の結果と一致する。小学校区を単位として、本尺度の平均得点が、近隣づきあい尺度や ISCI の得点との間に正の相関を認めたことから、本尺度は個人レベルではなく、一定の地区レベルで地域への愛着を把握する尺度として活用できる可能性も示唆された。本尺度により、旧農村地域に住む向老期から前期高齢者の健康づくり活動を促す「地域への愛着」を定量化できることで、今後、地域への愛着が地域の健康づくり活動に結びつくプロセスの検討や、ソーシャル・キャピタルとの関連などの定量的検証や、公衆衛生看護活動に「地域への愛着」に着眼したプログラムの実践や評価を取り入れることに貢献することが期待できる。

なお、本尺度は、旧農村地域に住む向老期から前期高齢者を対象にしており、地域性や、年齢が異なる対象でも使用可能であるか、検討していくことが必要である。

謝辞：

本研究にご協力いただきましたA市の皆さま、関係者の方々に心より感謝申し上げます。

本研究は、科学研究費助成事業 基盤研究（C）の助成（No.24593438）を受けて実施したものである。

【文献】

- 1) 森田彩子、高野健人、中村桂子他、地域に対する愛着が高齢者の5年生存率に及ぼす影響. 日本公衆衛生学会総会抄録集. 2009；68：239
- 2) 芦原ひとみ、鄭丞媛、近藤克則他、自殺率と高齢者におけるソーシャル・キャピタル関連指標との関連：JAGESデータを用いた地域相関分析. 自殺予防と危機介入. 2014；34（1）：31-40
- 3) Brown B, Perkins DD, Brown G. Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis. *Journal of Environmental Psychology*, 2003; 23: 259-271.
- 4) 鈴木春菜、藤井聡、地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究・論文集. 2008；25（2）：357-362
- 5) 高橋香子、末永カツ子、栗本鮎美他、住民の主眼的な健康づくり活動の推進要件に関する検討. 東北大学保健学科紀要. 2010；19（2）：73-80
- 6) 園田美保、住区への愛着に関する文献研究. 九州大学心理学研究. 2002；3：187-196
- 7) Altman I & Low SM (Eds.). *Place Attachment*. New York: Plenum Press. 1992.
- 8) Gustafson P. Meanings of place: Everyday experience and theoretical conceptualizations. *Journal of Environmental Psychology*. 2011; 21: 5-16.
- 9) Brehm JM. Community attachment: The complexity and consequence of the natural environment facet. *Human Ecology*. 2007; 35 (4): 447-488.
- 10) Collins D, Kearns R. Place attachment and community activism at the coast: The case of Ngunguru, Northland. *New Zealand Geographer*. 2013; 69 (1): 39-51
- 11) Williams DR & Vaske JJ. The measurement of place attachment: Validity and generalizability of a psychometric approach. *Forest Science*. 2003; 49 (6): 830-840
- 12) Raymond CM, Brown G, Weber D. The measurement of place attachment: Personal, community, and environmental connections. *Journal of Environmental Psychology*. 2010; 30: 422-434
- 13) 真鍋知子、地域愛着心の規定要因－地域生活環境評価を中心として－. 人間文化研究科年報. 1996；12：115-124
- 14) 原田謙、杉澤秀博、杉原洋子他、高齢者の地域への愛着に関連する要因－地域環境の質に着目したマルチレベル分析－. 第55回日本在宅社会科学会. 2013；276
- 15) 大谷華、芳賀茂、地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響. 立教大学心理学研究. 2003；45：1-9
- 16) 尾関美喜、吉澤寛之、中島誠他、地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響－地域からの恩恵と地域への愛着による媒介モデル－. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 2009；56：1-9
- 17) 萩原剛、藤井聡、交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析. 土木計画学研究・講演集. 2005；32
- 18) 鈴木春菜、藤井聡、「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集. 2008；64（2）：179-189
- 19) 鈴木春菜、藤井聡、「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究. 土木学会論文集. 2008；64（2）：190-200
- 20) 槇野光聰、添田昌志、大野隆造、地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響. 日本建築学会大会学術講演梗概集. 2001；769-770
- 21) 引地博之、青木俊明、大淵憲一、地域に対する愛着の形成機構－物理的環境と社会的環境の影響－. 土木学会論文集 D. 2009；65（2）：101-110
- 22) 酒井太一、大森純子、高橋和子他、向老期世代における“地域への愛着”測定尺度の開発. 日本公衆衛生雑誌. 2016；62（11）：664-673.
- 23) 滝澤寛子、櫻井尚子、健康づくり活動参加者が地域への愛着を形成するプロセス－西日本農村地域の向老期から前期高齢者を対象に－. 第3回日本公衆衛生看護学会学術集会講演集. 2015；207

- 24) 榊田聖子、金谷志子、津村智恵子、高齢者の地域見守りネットワークとソーシャル・キャピタル. 高齢者虐待防止研究. 2010 ; 6 (1) : 130-139
- 25) 農林水産省農村振興局農村におけるソーシャル・キャピタル研究会. 農村のソーシャル・キャピタル～豊かな人間関係の維持・再生に向けて～. <http://www.maff.go.jp/j/nousin/noukei/socialcapital/pdf/data03.pdf> [平成29年4月20日検索]
- 26) 農林水産省. 食料・農業・農村基本問題調査会第2回農村部議事録. http://www.maff.go.jp/j/study/nouson_kihon/pdf/nouson_h090725.pdf [平成29年4月20日検索]
- 27) 福原俊一、鈴鴨よしみ、SF-36v2日本語版マニュアル. 特定非営利活動法人健康医療評価機構. 京都 : 2004.
- 28) 大賀英史、大森豊緑、近藤高明他、地区単位ソーシャル・キャピタルの測定尺度の妥当性に関する検討—エコメトリックな視点による「近隣効果尺度」の日本語版の開発—. 厚生学の指標. 2010 ; 57 (15) : 32-39
- 29) 市田行信、吉川郷主、水野啓他、ソーシャルキャピタルの尺度開発に関する研究—中山間地域等直接支払制度における協定締結を題材として—. 環境情報科学論文集. 2006 ; 20 : 409-414
- 30) 大賀英史、狩野照誉、稲葉陽二、ソーシャル・キャピタルと主観的な健康感および精神的健康との関連—近郊都市の市民活動による環境測定尺度を用いたスノーボール調査より—. 日本衛生学雑誌. 2008 ; 63 (2) : 459
- 31) 市田行信、吉川郷主、松田亮三他、ソーシャル・キャピタルと健康. 公衆衛生. 2005 ; 69 (11) : 914-919
- 32) 大森純子、三森寧子、小林真朝他、公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析. 日本公衆衛生看護学会誌. 2014 ; 3 (1) : 40-48.
- 33) 大谷華、居住環境愛着の3成分構造とwell-beingとの関連性—高齢者と就業成人の比較から—. 立教大学大学院文学研究科前期課程(心理学専攻)2000年度修士論文. 2001.
- 34) 播摩優子、佐々木久長、地域住民のソーシャル・キャピタルと精神的健康との関連. 秋田大学保健学専攻紀要. 2013 ; 21 (2) : 97-111